

ミゲル・プリモ・デ・リベラ

Miguel Primo de Rivera

- 1870年1月8日 - 1930年3月16日
- スペインの軍人・貴族(第二代エステーリャ侯爵)
- 1923年より1930年までスペインを独裁的に統治







その生涯

- 1870年： 1月8日、ミゲル・プリモ・デ・リベラがヘレス・デ・フロンテーラで生まれる。
 - プリモ・デ・リベラ家はアンダルシアの名家であった。
 - 彼の叔父であるフェルナンド・プリモ・デ・リベラ将軍(1831-1921)が、1878年に、第三次カルリスタ戦争を終結させた功により、新設されたエステーリャ侯爵に序せられた。
 - この叔父の死後ミゲルが第二代エステーリャ侯爵となった。
- 1884年： 士官学校に入学
 - 卒業後、メリーリャ(北アフリカ)に送られる。
 - その後も、植民地で活躍(モロッコ、キューバ、フィリピン)
- 1902年： カシルダ・サエンス・デ・エレディアと結婚、6人の子供をもつ。
- 1909年： 北アフリカに送られる。
 - モロッコ戦争に従事

- 1912年： 旅団長に昇進
- 1915年： スペインに戻る。カディス軍司令官。
- さらに、バレンシア、マドリードの方面軍司令官となる。
- 1921年11月： 北アフリカ植民地の放棄を唱える。

「戦略的観点からして、ジブラルタル海峡の向こうに兵士を置くことは、スペインにとって望ましくない。」

⇒政府によって解任
- 1922年： 5月、バルセローナ方面軍司令官となる。
 - バルセローナの社会問題に直面する。
 - アナーキストのテロ、工場主のピストル暗殺者利用、カタルーニャ主義の高揚
 - 王政復古体制の政治の麻痺
 - バルセローナで、地域主義同盟の保守的階層の支持を得る。

王政復古体制の崩壊

※第一次世界大戦後、スペインの経済は落ち込み、労働運動が先鋭化するなど経済的、政治的な危機を迎えていた。

■ 植民地問題の深刻化

- 大戦終了後、フランス軍と競って、モロッコでの軍事行動を強める。
※1912年にモロッコを保護領化（フランスとのモロッコ分割）
- モロッコ人正規軍、外人部隊、本土からの応召兵
- 「アフリカ派」の軍人
- 1921年7月、アヌアルにおいてモロッコ民族運動軍に大敗北を喫する。
⇒軍人追求の声の高まり／軍隊の反発

■ 議会政治への信頼の低下

- 無投票当選の増加

■ カタルーニャでの社会闘争の先鋭化。カタルーニャ・ナショナリズムの急進化

- 官憲・労働・資本の三者によるテロ行為。首相ダトの暗殺
- 1922年、フランセスク・マシアがアスタット・カタラを創設

■ 唯一の收拾策としてのクーデタ——憲法によらない統治への期待

- 1923年: 9月12日、バルセロナ方面軍司令官プリモ・デ・リベラがカタルーニャに戒厳令を布告

※テロリズム、社会的混乱、分離主義を放置した政党・議会を非難。

→プリモ・デ・リベラが軍政府を組織

※プリモ・デ・リベラは、軍部や教会を中心とする大土地所有者層の支持を得て、クーデターを成功させた。

- その後、内々にクーデターの承認を得ていた国王アルフォンソ13世より首相に任命され、軍事独裁政権を樹立した。

プリモ・デ・リベーラの独裁

■ 独裁の政治的展開

- 憲法停止、議会の解散、戒厳令の拡大
- 1926年までにモロッコを平定
- コーポラティヴ(職能代表制的)な国家を追求
- 「愛国同盟」の組織
- 国民会議の設置(27年9月)
- 労資紛争調停委員会



Desembarco español en Alhucemas
durante la Guerra del Rif, 1925

・1927年、イベリア・アナーキスト連盟 (FAI) の創立

・UGTの独裁への協力



・カタルーニャ・ナショナリズムに対する弾圧

※カタルーニャ語使用を私的場に限る。

※カスティーリャ知識人のカタルーニャ語・カタルーニャ文化の擁護

→1924年、「カタルーニャ語擁護のカスティーリャ作家の声明」

■ 独裁下の経済

- 「経済ナショナリズム」の強化

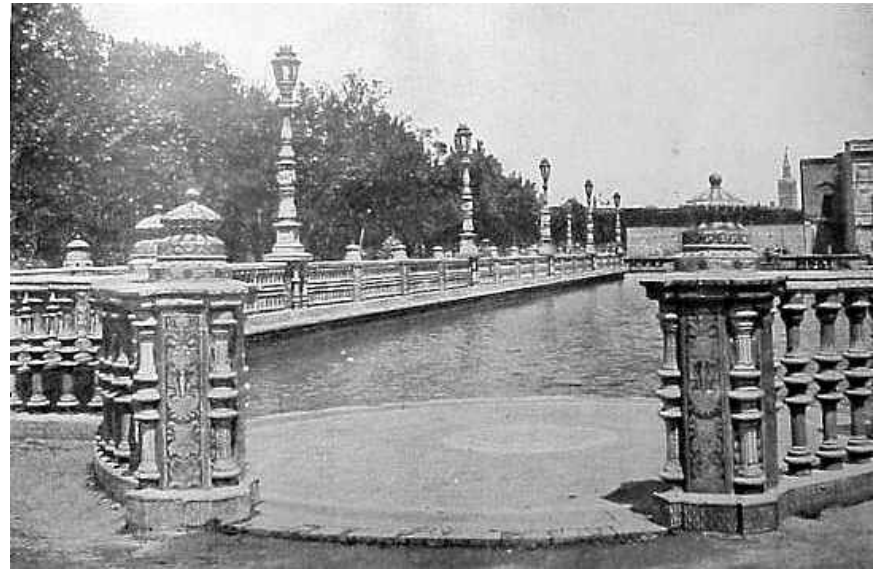
- 積極的な公共投資

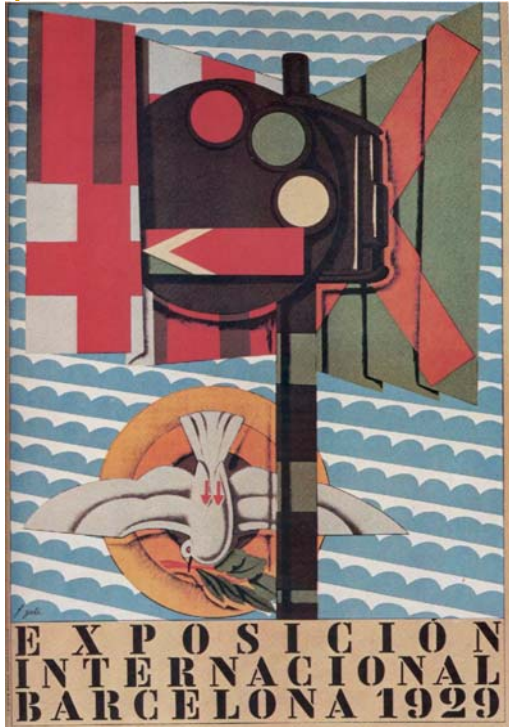
- 1929年、セビーリャでイベロアメリカ博覧会

- 1929年、バルセローナ国際internacional博覧会

 - ※Cf. 1888年のバルセローナ万国universal博覧会

- 赤字財政、通貨危機





独裁の崩壊

- 1926年、共和主義同盟の結成
- 同年6月24日、聖ヨハネ祭蜂起（サンファナーダ）
- カタルーニャの反独裁運動の高まり
 - 1926年、マシアがフランスから義勇兵を率いて遠征を目指す。
 - 「カタルーニャ問題」の重要性をアピール
- 1929年以後、左派勢力結集の動き
- 1929年1月、軍隊の一部による反独裁蜂起
- 1929年、通貨危機
 - ※世界恐慌の影響は、31年以後。
- 国王による立憲制復活の画策
 - 1930年： 1月、プリモ・デ・リベールの辞任
 - その数ヵ月後、亡命先のパリで死去した（3月16日）。

- 彼の息子の第三代エステーリャ侯爵、ホセ・アントニオ・プリモ・デ・リベラは、後にファシスト政党のファランヘ党を結成する(1933年10月)。

